

平成 2 年 5 月 29 日	植 防 情 報	発 表	栃 木 県 病 害 虫 防 除 所
--------------------	---------	-----	-------------------

病虫害発生予察特殊報第 1 号

病虫害名：リンゴ黒星病

1．発生状況

平成 2 年 5 月 24 日に、宇都宮市のリンゴ園から専門技術員を通じ黒星病症状の標本の同定依頼があったため、検鏡するとともに現地調査を実施した結果、王林を中心にふじ等の品種で発生が確認された（樹齢 2 ～ 4 年）。

現在、発生が確認されたのは 1 園のみであるが、その他の園及び栽培地で引き続き調査中である。

2．全国の発生状況

本病は、昭和 27 年頃、札幌市で発生が初めて確認された。その後発生は徐々に拡大し、十数年後には北海道全域に広がり、その後東北地方に拡大、そして現在に至っている。今年 5 月 28 日現在、山形県、長野県、福島県、岩手県の各県において注意報が発令されている。

3．病 徴

葉、果実、新梢及び芽のりん片に発生する。

葉には開花前後から表裏両面に発病し、直径数 mm、類円形、緑褐色、周囲がぼやけたすす状の病斑ができ、のちに不規則に若干拡大し、黒緑色になる。さらに古くなると健全部との境界が比較的明瞭となり、やや光沢のある暗褐色または灰黒色となる。また葉柄にも発病し、黒色小斑点を生じる。重症の葉は、早期に落下する。

果実では幼果が小指の頭くらいになったころから、多少角張った 1 ～ 2 mm の黒

点として認められる。拡大するにつれ暗褐色となり表面に小亀裂を生じる。発育の不均衡から果形が歪み、ついには深く裂開する。果実の肥大盛期を過ぎた秋口の感染では直径数mm、円形、黒緑色の病斑を形成する。直接果肉を侵すことはないが、2次的に腐敗を誘発する。

新梢では若い緑色の部分が直径2～数mmの円形ないし長円形にわずかに隆起し、のちに中央部の表皮が破れて黒色粗面となる。激しく発生すると、一面に小型病斑が連なり灰黒色、カサブタ状を呈する。

芽の形成期に濃厚な感染を受けると、りん片が侵され、茶褐色の斑点を生じる。芽のりん片上の病斑は枝病斑に似ている。

4．病原菌の特徴と生態

病原菌は、*Venturia inaequalis* で、子のう菌に属し、子のう胞子と分生胞子とを作る。子のう殻は冬期間に落葉の病斑組織中に生じる。子のう胞子は淡黄緑色、長円形、不均等な2胞からなり、隔膜部が浅くくびれる。分生胞子は新しい病斑上に多く形成され、暗褐色、単胞または2胞で槍の穂先型である。2～31で発芽し、適温は15～20。適温下での潜伏期間は約8日である。本病菌はリンゴ属植物だけを侵す。

本病の第1次発生は主に越冬病葉中に形成された子のう胞子によるが、一部は枝や芽のりん片病斑上に翌春新生した分生子による。リンゴの感受性は若い組織ほど高い。子のう胞子、分生胞子ともその飛散、侵入に降雨を必要とする。以上のことから、発芽期から落花期の新梢生育期に雨が多いと多発生する。一般に半旬平均気温が15～20 くらいのとき発病が多く、20 を超えると停滞し、秋冷期に再び増加する傾向がある。

5．防除対策

- 1) 病葉や病枝は土中に埋めたり、焼却処分する。
- 2) 伝染源は苗木や幼木であることが多いことから、苗購入時には苗木へ薬剤散布を行って発生の拡大を防ぐ。
- 3) 発生が見られる場合は、下記のEBI剤(印)のうちいずれかの薬剤を1回散布し、その後は他の薬剤で抑え、梅雨中に引き続き発生が増加するような

ら、さらにもう1回E B I剤を散布し防除する。

バイコラル水和剤	2,500~3,000	倍液
ルビゲン水和剤	3,000~4,000	”
トップジンM水和剤	1,500~2,000	”
ベンレート水和剤	2,000~3,000	”
有機銅剤	500~800	”

印の薬剤は耐性菌発生防止のため、年間合わせて2回以内の使用とする。